NEWS Kio FD+

2015年4月号

発行日　2015年4月15日

編集部　教育推進室

学生の基礎学力アップに全学的取り組みを

巻 頭 言

教育学研究科長・教育推進室員　　白石　裕

2014 年度の FD 研修会は、非常勤講師として本学で「日本語と表現」の授業（1 回生配当・教養科目）をご担当の占部礼二先生に大学生の「書く力」について講演をしていただきました。当日、貴重なご講演を賜りました占部先生には感謝を申し上げます。学生の文章力・読解力が低下しているということについては以前から指摘されており、多くの大学が抱える今日的課題となっています。本学もご多分に洩れず、その対策に頭を悩ませています。占部先生のお話は、今の学生の「書く力」の問題点とその対策を、本学の学生の場合を事例にして具体的に示していただき大変参考になりました。先生の授業については学生の評価と要望がきわめて高いと聞き、さもありなんと思いました。おそらく、学生は文章を書く面白さと書く力がついてきていることの実感を味わっているのでしょう。面白く楽しみながら、書く力の基礎が培われる。これは教育の原点でしょう。当日、研修会にご参加が叶わなかった方々にもぜひ石川先生の報告を読み、学生の指導に役立てていただきたいと願っております。

上でも記したように、書く力を含めた国語力を含めて、学生の基礎学力のアップは多くの大学の課題となっております。本学でも教育推進室を中心にしてその対策を検討してきました。その結果、入学前教育としてのスクーリングや E-ラーニング、入学後の初年次教育としての専門準備科目の提供、ベーシックセミナーの開設とその充実など多くの取り組みを行っております。他方、スタディサポートセンター（現在は教採・公務員対策室に統合）では数学・理科など基礎教科の学習指導を行ってきました。こうした取り組みにはまだまだ課題も少なくありませんが、着実な成果をあげてきたといっても過言ではないでしょう。また、本 NEWS の「研究授業」の紹介にもあるように、本学の先生方は学生の基礎力アップに相当腐心していただいております。

ただし占部先生の講演を拝聴して、やはり「書く力」を含め、基礎学力中の基礎といわれる国語の力をもっと学生に身につけさせたいと思いました。私なら、卒業論文の指導を通してでしょう。そのためには、石川先生も書いているように、授業全体を通して、カリキュラムの体系性を確保し科目間の連携を図るということ、つまり、あらためて全学的な取り組みが求められるということでしょう。

今回の研修会が、本学のさらなる教育の発展につながることを期待します。

（今後、巻頭言は、教育推進室員の持ち回りとします。）

教育推進室を軸とした教育改革を

全学的な教学マネジメントが求められているなか、本学においては昨年 12 月に教育推進室の室長を学長とし、またその対象を大学院にまで拡げることになりました。

入学前から卒業後にわたる教育内容や教育方法の組織的かつ継続的な改善が教育推進室の役割であり、その実現には先生方と担当職員の知恵や努力が必要です。教育推進室の下には「教学 IR 担当部会」「共通教育専門部会」「英語教育推進専門部会」「ICT 活用専門部会」「健康科学研究科専門部会」があり、FD 活動については「授業改善専門部会」が担当しています。各専門部会で、それぞれの課題を明らかにして計画的に取り組んでいくことが求められています。FD 活動につきましてもご意見、ご協力をよろしくお願いします。

（事務局長）

＜ C O N T E N T S ＞

特 集　2014 年度 FD 研修会・・・・ 2
大学生が抱える
“書く力”についての問題点

研究授業レポート
「理学療法技術実習Ａ」　・・・・・・・・・3
「運動生理学」・・・・・・・・・・・・・・5
「アパレル構成論」・・・・・・・・・・・・5
「学校看護Ⅲ」・・・・・・・・・・・・・・6

特　集

2014 年度　FD 研修会報告

大学生が抱える“書く力”についての問題点
－『日本語と表現』の講義紹介と文章力の実情－」

講　演　　森ゼミ副代表　占部礼二先生

報告：石川　裕之

2015 年 2 月 10 日（火）に教育推進室主催の「2014 年度　FD 研修会」が開催されましたので、その内容について報告いたします。今年度の研修会のテーマは、「書く力」の指導についてです。「書く力」は大学での学びにおいて非常に重要なものです。なぜならば大学の学びにおいては、受動的に知識を吸収するだけでなく、自らの意見や考えを能動的に、かつ論理的に表現する必要があるからです。自らの意見や考えを表現する手段には様々なものがありますが、レポートや卒業研究など、「書く」という行為は大学の学びにおいて最もよく使われる表現手段といえるでしょう。そこで今年度の研修会では、森ゼミ副代表で本学の「日本語と表現」（1 回生配当・教養科目）の授業をご担当いただいている占部礼二先生をお招きし、「大学生が抱える“書く力”についての問題点－『日本語と表現』の講義紹介と文章力の実情－」と題してご講演いただきました。

若者をとりまく「書く力」の指導の現状

冒頭で占部先生ご自身と森ゼミについての紹介があり、その後、現代の若者をとりまく「書く力」の指導の現状について全般的なお話がありました。先生は立命館大学でマスコミ講座「ハテナの旅」をご担当されており、学生に地図だけを渡して面白いものを見つけさせるといった取り組みをされています。そうした中で先生は、現代の学生は自分の力でテーマを見つける感性が鈍っており、疑問を持つ力や質問をする力が欠如しているとお感じになっているとのことです。テーマを見つける感性が鈍っている学生は、たとえば就職活動でエントリーシートを記入する際にも、なぜその企業や職業を選んだのかといった志望動機が書けずに困るケースが多いとのことでした。一方、先生は関西大学ライティングラボによる高大連携の取り組みとして奈良育英高校の出張講座も担当されており、高校生に 3,000～4,000 字の論文執筆を課しているそうです。こうした取り組みのように、高校のうちら「書く力」を育成しようという動きが近年広がってきているとのことでした。

また、高校・大学・就職活動・ビジネスといった、各学校段階や人生の場面で求められる「書く力」が異なるということについてもご指摘されました。たとえば高校では読解力が重視されて「書く力」はそれほど求められないのに対し、大学ではレポートや卒業研究など字数の多い文章を書いたり、調べたことで内容を裏付ける力が重視されます。しかし就職活動の場面になると一転して履歴書など字数が少ない文章を端的に書く力が求められ、さらにビジネスの場面では差別化された内容を書いたりベネフィット(利益)を明確に示す力が求められます。このように、それぞれの学校段階や人生の場面ごとに求められる「書く力」の間のギャップをどのように埋めていくかが、「書く力」の指導において重要な課題となっているとのことでした。

「日本語と表現」の内容と実践

次に、占部先生が本学でご担当されている「日本語と表現」の内容や実践についてのお話がありました。シラバスによればこの授業の到達目標は、第１に、学生生活で、ひいては社会人生活で必要な文章力を身に付ける、そして第２に、書く力を身に付けることで、考える力を伸ばすことができるという点にあります。そのために先生は、「誰に、何を、どう書くか」について学生に意識付けることを主眼に置き、講義とレポート・添削指導を織り交ぜつつ授業を進行されているとのことです。

まず、「誰に書くのか」については、自分の文章のターゲットやねらいを学生に意識付けることを目指します。次に「どう書くのか」については、①客観表現と主観的表現のメリット・デメリットを踏まえつつ伝わる言葉で書く、②伝えたいポイントを絞り込み一点突破で書く、さらに、事実やエピソードを交えたり、全体から個別へと焦点を絞っていくことで③具体的で、④ディテールのしっかりとした

文章を書く、という４つのステップを踏むことで学生に「どう書くのか」を考えさせているとのことです。

最後に、「何を書くのか」については、身近な街の魅力を伝える「街作文」を書かせることを通じて考えさせているとのことです。その際には、バーバラ・ミントの『考える技術・書く技術』（ダイヤモンド社、1999 年）などを参考に、“Guide”（つかみ、タイトル）、“Situation”（土台、前提）、“Complication”（ギャップ、変化）、“Question”（問題）、“Answer”（メッセージ、答え、解決法）という５つの構成要素（GSCQA）を意識して書くようにご指導されているとのことでした。

本学の学生の特徴と課題

占部先生はこれまで３年間本学で「日本語と表現」をご担当されて来ましたが、その中で見えてきた本学学生の特徴として次の２点を挙げられました。まず、他大学に比べて出席率が高く、「上手く書けるようになりたい」という意欲が高い学生が多いとのことでした。本学の教職員としてはうれしいお言葉です。しかし一方で、「調べる、探す」といった新しい世界を開こうとする意識が低く、入学時点から将来やりたいことが絞り込まれているためか、自分の将来の職業に関係のあるものにしか関心を示さない学生も少なくないとのことでした。耳が痛いものの正鵠を射たご指摘だと思います。占部先生のご指摘されるこうした特徴は、

もしかすると「日本語と表現」の受講生のみならず、本学の学生に全般的に見られる特徴といえるかも知れません。簡単にいえば、「意欲は高いが、視野が狭い」学生が多いということでしょう。学生の意欲を高く維持したまま、いかにしてその視野を広げていくかが本学の教育の課題といえます。

講演の後には意見交換の時間が設けられましたが、会場からは「記述式の試験やレポートなどで主語と動詞がマッチしない学生がいる」、「言葉の本質を理解していない学生が多く、疑問を持つ力が不足している学生が多いという話に共感した」といった意見や、「コピペ問題についてどう考えるか議論していくことも重要である」といった提言が出ました。また、「比較的簡単に身に付く『書く』技術と、たくさん読まないと身に付かない『書く』技術があるのでは」という意見や、「文章力が伸びるまでには一定の時間が必要なのでは」という意見も出ました。確かに学生が持っている「書く力」はそれ単独で存在しているのではなく「読む力」や「論理的に考える力」などと密接に関連していることから、教えれば比較的短期間で簡単に身に付く「書く力」がある一方で、「読む力」や「論理的に考える力」などを涵養する中ではじめて身に付くようなタイプの「書く力」もあるのかも知れません。

そうであるならば、「書く力」を伸ばすための指導をより効果的なものとするには「読む力」や「論理的に考える力」などその他の力を伸ばすための指導とうまく連動している必要がありますし、そのためにカリキュラムの体系性の確保や科目間の連携を図ることが重要になってくるのではないかと思いました。

研究授業レポート

「理学療法技術実習 A」

理学療法学科　　岡田　洋平

「理学療法技術実習 A」は理学療法学科３年生後期に開講される講義です。理学療法技術実習 A では理学療法における重要な治療手段である運動療法を健常者に対して適切に実施できることを目指しています。理学療法学科では 3 年生後期，4 年生に外部の医療機関において実際の患者さんに対して理学療法の評価や治療を行う臨床実習があります。健常者に対して実施できなければ，障害をもった方々に対して理学療法を行うことはできないので，上記の点を講義目標としています。

この講義は実習科目ですので，運動療法に関する実技の練習が中心です。運動療法の項目を一つ一つ学生さん全員の前でデモンストレーションしながら，私が実施している際にからだの持ち方や動かし方，力の入れ方，リスクへの配慮などどのようなことを意識，意図しながら行っているかを，できる限り明示的に伝えるよう意識しています。学生さんの中にはのみ込みのいい学生さんからそうでない学生さんもいます。学生さんは思いもかけない方法でしようとしたりすることもありますので，こんなことは説明しなくてもわかるだろうと思わず，できる限り詳細に学生さんに伝えるようにしています。ちなみに，私自身は学生時代後者の方で今もずば抜けた技術を持っているわけではありません。

理学療法学科 3 年生の後期は，実習にでる前にこれまでに学んだ知識と技術を統合していく非常に重要な時期です。講義の中では，各運動療法を練習する前にそれを実施するために必要な知識を解説し，その後実習することにより，できる限り学生さんにこれまでことを実際に自分のからだを動かして体現できるよう促したいと考えています。この講義は実習講義ですので，試験は実技試験を実施しています。2 年生は松尾篤先生による理学療法評価学実習において実技試験があり，学生さんにとっては緊張の高まる瞬間があります。3 年生ではこの講義でしか実技試験がありません。実習にでる前の大切な時期にもう一度緊張感と意識

を高めてもらうためにも，全員に対して実技試験を実施します。

3 年生後期は実習前で Kio 元気塾に参加する学生さんも多くいるため，理学療法における実際の臨床についての関心がより高まってきています。ですので，講義の中でできる限り実際に私自身が経験した症例の話もするようにしています。私は神経疾患についての経験が多いですが，講義に一緒入っていただいている庄本康治先生は各疾患において豊富な経験と技術を持っておられます。この講義では基本的に私が前でお話ししていますが，私と庄本先生のダブルマイク制としており，臨床に関する実例や補足の説明などを随時庄本先生からもしていただいております。

この講義は上記のような形で実施していますが，今後もルーティン化することなく試行錯誤しながら講義の内容や伝え方を工夫していきたいと考えております。

「運動生理学」

健康栄養学科　　永澤　健

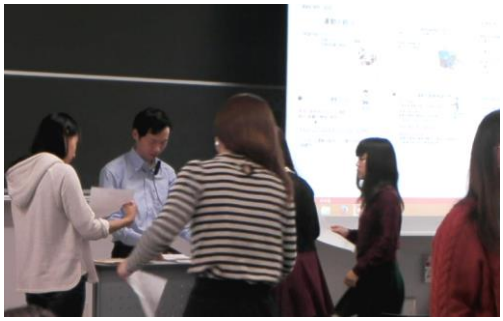
「運動生理学」は、健康栄養学科 2 年生を対象とした必修科目で、運動に伴って生体の機能がどのように適応して変化するのか、そのメカニズムを学び、生活習慣病の予防と治療のための運動処方の基本的考え方を身につけることを到達目標としています。管理栄養士を目指す学生を対象とする「運動生理学」ですので、糖尿病の運動療法の効果のメカニズムや､運動によるエネルギー消費量の算定方法、運動時の栄養補給、スポーツをする人に対する栄養管理な

ど、栄養に関連した内容に焦点を当てて、授業を展開しています。学生の中には「運動」に対する興味があまりない人もいますので、例えば「運動だけではやせない。栄養管理も同時に必要」「運動は食欲を増進させるので注意する」など栄養に関わる話を多く取り入れるようにしています。また、3 年次には「運動生理学実習」がありますので、この講義で身につけた知識が、運動時の生体機能の変化を観察する際に応用できるように、授業内容を考えています。

授業で取り上げる学修項目は、毎年、授業計画を立てる時に悩む部分で、試行錯誤しながら、現在の項目になっています。15 回の授業は、まず基礎的項目として、筋、呼吸、血液、循環、内分泌、骨に分けて身体運動時の人体の仕組みについて組織・器官レベルでの機能について学習します。次に、応用として、生活習慣病と運動、健康づくり運動の生理学的効果、スポーツ栄養学、運動処方、身体活動基準を取り上げています｡各回の授業の進め方としては、まず冒頭の 10 分を前回の復習の時間に充て、その後、新規の内容に入ります。昨年度までは、授業内容を黒板に板書していましたが、本年度からスライドによって板書内容を提示して、ノートに取らせています。最後の約 20 分間は、確認問題として正誤問題を 10 問、記述問題を 2 問程度行っています。正誤問題は国家試験に対応した問題を出

題し、記述問題は学んだ知識を基にして論述する力を養うことを目的としています。

今回、実際に講義している様子を VTR で確認することができ、授業改善に直接役立つ多くの情報を得ることができました。身振り手振りで具体例を示すときは後方からも見えやすいように立ち位置をもっと工夫すること、学生がノートに写している時は静かに待つ必要もあることなどです。また、確認問題として小テストを授業の最後に実施していますが、この小テストを最初に実施することで復習と授業導入がスムーズになるのではというご意見をいただきました。同じ確認問題でも実施するタイミングを変えることで、異なる効果が得られることに気がつくことができました。スライドの説明に使用していたレーザーポインターの赤色が見えにくいとのご指摘をいただき、現在は指示棒を併用しています。自分の授業を VTR で観るのは恥ずかしい思いもありましたが、このように自分では気がつかない箇所をご指摘いただき、大変貴重な機会になりました。さらに、授業の良い点をご指摘いただき、評価していただいたことも率直に嬉しく、授業改善へ向けて意欲を高めることができました。



研究授業にご出席いただきました先生ならびに研究授業の準備をしていただきました事務局の皆様に感謝致します。

「アパレル構成論」

人間環境デザイン学科　　村田　浩子

「アパレル構成論」は人間環境デザイン学科１回生後期に配当されています。
チャイムが鳴ると同時に「起立」「礼」をしてから授業を始めます。

大学生なのにと思う学生もいたようですが、観察していると「起立」「礼」は授業を始める際のけじめになっているようです。

毎授業に２～3 人ずつ、「衣」に関する新聞の切り抜き記事を発表し感想を述べるという課題を出しています。他の学生はその発表を聞いて感想を書いて提出します。
新聞を読むことはほとんどないという学生が多い中、この宿題が出された学生は図書館で新聞を読み関連記事を探します。年を追うごとに宿題を忘れる学生も少なくなり、しっかりと発表してくれるようになりました。本人にとっては少々大変かもしれませんが、他の学生にとっても話題の「衣」情報を知る時間になります。

「アパレル構成論」を受講している学生のほとんどが前期開講の「衣生活論」を受講しています。「衣生活論」では被服材料、被服衛生、被服整理、被服管理について学んでいるので、次の段階として衣服の構成を学びます。

第１回の授業は、構成方法には平面構成と立体構成があることから始まります。

平面構成として和服を、立体構成として洋服を、衣服には色々な型式があることを世界の民族衣装の着付けを実際に見るなど、できるだけ実感できる授業になるよう心がけています。

本日の研究授業では製図の補正を学びました。前回までの授業で、衣服の製作に必要な人体寸法の計測について、そして原型の製図作成を学んでいます。

人間の体型にはそれぞれ特徴があり、加齢等によっても変化してきます。また学生それぞれにも悩みもあるようです。各自の体型の悩みをカバーするために必要となる製図上での補正を学びます。今回は悩みの中でも多く聞かれたいかり肩、なで肩、猫背、反身、身体の厚みから出るしわをカバーするための原型の補正線の説明をし、学生も自分の作図に線を入れました。衣服上のしわやひきつれが体型の特徴から出ること、そのしわ等をなくすための製図上での補正を知ることで美しいシルエットの衣服を製作することが出来るようになります。

次年度アパレル構成実習Ｉで実際に衣服を製作する際に、この授業で学んだ理論が実践されることを念頭においての

授業です。

おしゃれに興味を持つ学生はたくさんいます。着崩したり適正ではないサイズの衣服を好んで着る学生も多くいます。布は多少変形するため製図や縫製を軽く考えがちですが、基本が大切であることが伝わるよう繰り返すようにしています。

最後にお忙しい中、研究授業にご出席いただきました先生方に御礼申し上げます。

「学校看護 Ⅲ」

現代教育学科　　岡本　啓子

今回の研究授業は、「学校看護Ⅲ」という科目で、養護教諭免許取得の必修科目に指定されています。対象は学校看護ⅠおよびⅡを履修済みの学生で大半が２回生ですが、編入生や少し遅いスタートで養護教諭を目指した３回生が受講しています。この科目は、児童生徒等のライフステージに応じた学校における学校看護援助技術が具体的にわかることを目的としています。学校看護Ⅰ・Ⅱで、「看護および学校看護とは何か」について考え、学校看護の対象である子ども理解の方法、学校看護を行うプロセスの理解、学校看護技術の児童生徒に相応できる基礎的知識と技術などを修得します。その後に学校看護Ⅲでは、保健室執務を具体的に想定したうえで、日常遭遇することの多い児童生徒等の健康問題を取り上げ、その原因・予防対策・学校看護法について学びを深めます。具体的には、学童期、思春期などライフステージに応じた疾病障害（生活習慣病・先天性疾患・慢性疾患等）の学校看護援助法、また、心身に障害を持った児童生徒等への支援や学校での事故対応（救急処置）時の学校看護援助法について学びます。15 回の授業を通し、学生は自らの養護教諭観を持ちながらシミュレーションして考察することで学校看護を修得していきます。

研究授業は第 10 回目の講義内容で、テーマは「小児慢性疾患の理解と支援・援助（特別な支援が必要な疾患）」でした。慢性疾患のある児童生徒への学校看護の目的は、最善の学校日常生活を送れるように支援するということですが、社会生活のモデルとなる学校における、必要以上の制

限をかけない、無理な行動をさせないなどの制約の中での支援となります。これらは、疾病理解が充分でないと的確な支援につながりませんので、充分な事前自己学習の上、授業に臨むことを課しています。とくに今回の授業内容は、教員からの講義形式をとっていますが一方的になりやすいため、学校における児童生徒の事例を提示しながら、学生には自らが養護教諭としてどう判断・行動するのかを考える時間を設けました。また、学校教育における学校看護の役割として、「自分の健康について考えられる機会を与える重要性が大きい」ことを考える機会を持ち、将来を見据えた自己健康管理能力の獲得にまで視野を広げることを学生に学んでもらいます。免許必修専門科目ということで、興味の持ち方はとても高く、自らがそれぞれに集中していました。授業後の感想コメントには、「先生方に見ていただくことでより集中し、もっと学びたいと思った」と記述する学生が多くみられ、授業者として、少し驚きましたが、うれしい限りです。

授業の導入部分では、前回までの学びを確認するために話しましたが、少し時間を取りすぎたように思います。まとめに十分な時間が取れない状況になってしまいました。また、VTR で自分の講義を学生側から見る機会を得て、自分が思い浮かべる授業風景とは異なっていました。とくに、学生への視線の配り方は異なるものでした。本科目は、養護教諭としての実践の基盤となる専門知識を学ぶという特性から、学生 25 人に教員が直接メッセージを伝えたいと考えています。全員の視線を汲み取っているつもりでしたが、実際はそのような状況を見てとれませんでした。ぜひ、改善していきたい点です。

最後になりましたが、先生方皆さま、お忙しいなか研究授業にご参加いただき心よりお礼申しあげます。

ニュース「ＦＤ＋」の発行が遅くなりまして、大変申し訳ございませんでした。（事務局）